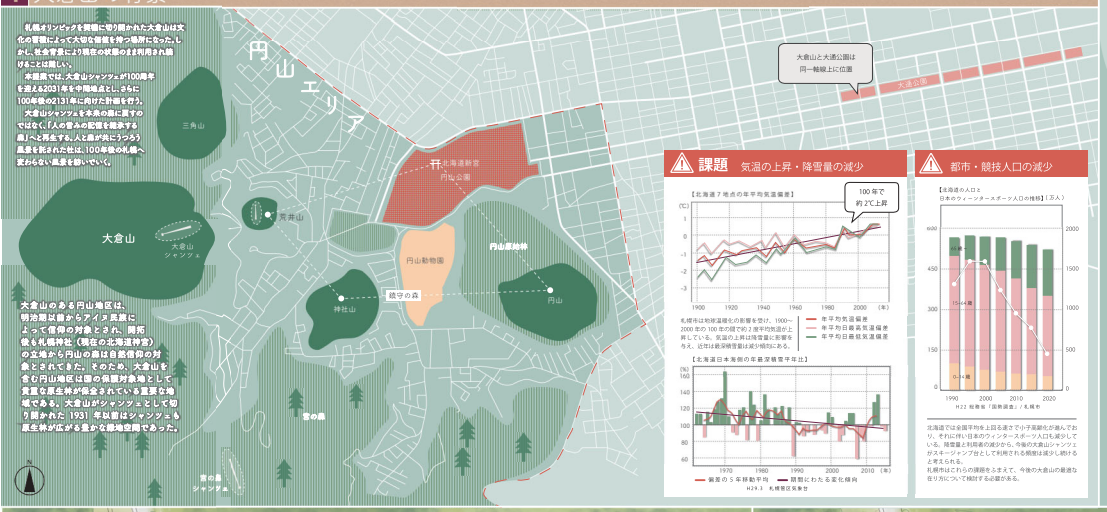
記憶の杜 ～託された憶いを次へと紡ぐ～

対象地：大倉山シャンツェ / 札幌市

札幌市は 1972 年の札幌オリンピックによって大きく発展した街である。スキージャンプ場である大倉山シャンツェはオリンピックの中心的な存在であり、現在でも札幌オリンピックの歴史を伝える継承地となっている。

1 大倉山の背景



札幌オリンピックを契機に切り開かれた大倉山は文化の継承によって大切な神域を持つ場所になった。しかし、社会情勢により歴史の状態のまま利用され続けることは難しい。
本調査では、大倉山シャンツェが100周年を迎える2031年を中間地点とし、さらに100年後の2131年に向けた計画を行う。
大倉山シャンツェを本来の姿に戻すのではなく、「人の営みの記憶を継承する森」へと再生する。人と森が共にうつろう風景を託されたまは、100年後の札幌へ変わらない風景を紡いでいく。

大倉山のある円山地区は、明治期以降からアイヌ民族によって信仰の対象とされ、開拓後も札幌神社（現在の北海道神宮）の立地から円山の森は自然信仰の対象とされてきた。そのため、大倉山を含む円山地区は国の保護対象地として貴重な原生林が保全されている重要な地域である。大倉山がシャンツェとして切り開かれた1931年以降はシャンツェも原生林が広がる豊かな緑地空間であった。

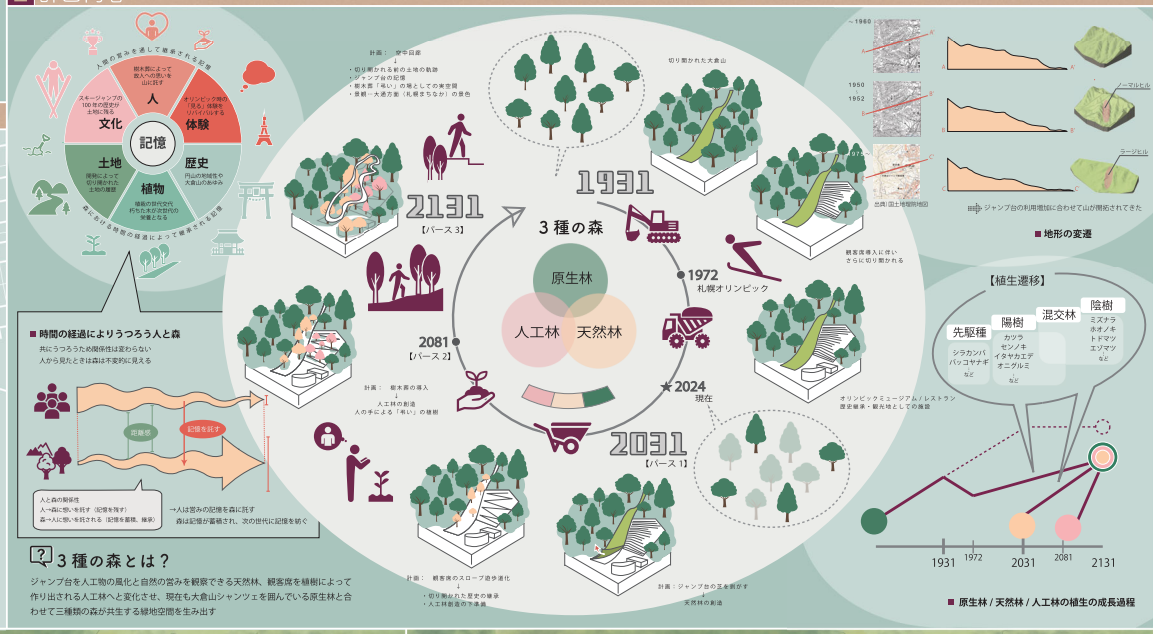
⚠ 課題　気温の上昇・降雪量の減少

札幌市は地球温暖化の影響を受け、1900～2000年の100年の間で約2度平均気温が上昇している。気温の上昇は降雪量に影響を与え、近年は最深積雪量は減少傾向にある。

⚠ 都市・競技人口の減少

北海道では全国平均を上回る速さで少子高齢化が進んでおり、それに伴い日本のウィンタースポーツ人口も減少している。降雪量と利用者の減少から、今後の大倉山シャンツェ、がスキージャンプ台として利用される機会は減少し続けると考えられる。
札幌市はこれらの課題を踏まえて、今後の大倉山の最適な在り方について検討する必要がある。

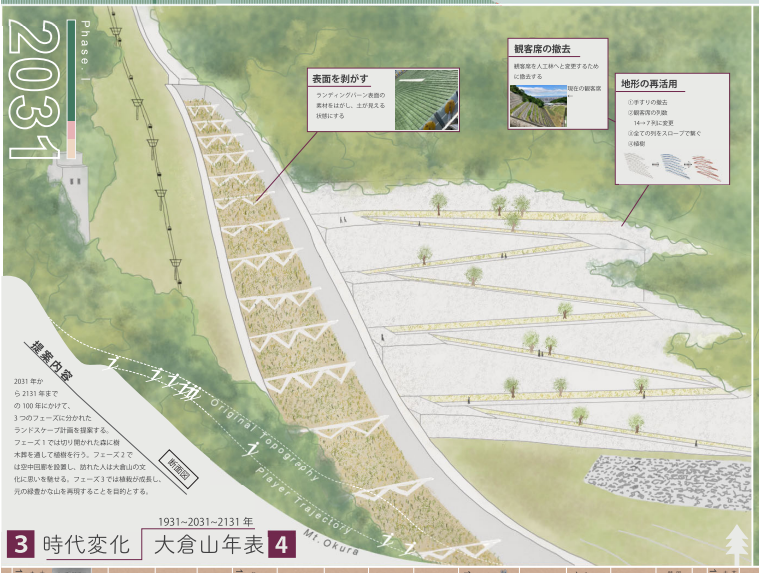
2 計画内容

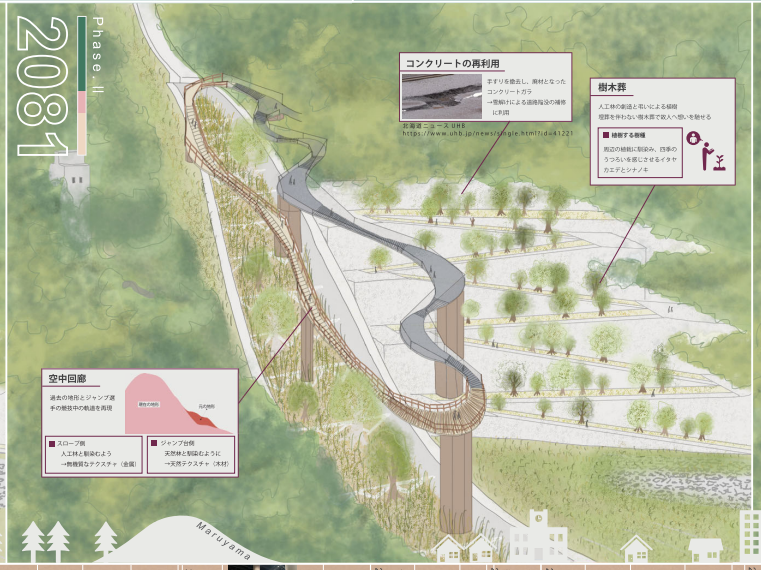

人間の営みを通して継承される記憶
人
樹木葬によって森人への思いを山に託す
文化
スキージャンプの100年の歴史が土地に残る
記憶
体験
オリンピック時の「憧る」体験をリハイバルする
土地
陸地によって切り開かれた土地の履歴
歴史
円山の地域性や大倉山の神々の
植物
植物の時代変化が生命の安寧となる
森に生きる植物の経過によって継承される記憶
■ 時間の経過によりうつろう人と森
共にうつろうた必関係性は変わらない
人から見たときは森は不変的に見える
距離感
記憶を託す
人と森の関係性
人→森に思いを託す（記憶を預ず）
森→人に思いを託される（記憶を基礎、継承）
→人は営みの記憶を森に託す
森は記憶が蓄積され、次の世代に記憶を紡ぐ
3 種の森
原生林
人工林
天然林
1931
1972 札幌オリンピック
2024 現在
2031 【パース 1】
2081 【パース 2】
2131 【パース 3】
計画：　空中回廊
・切り開かれる前の土地の軌跡
・ジャンプ台の記憶
・樹木葬「眠り」の場としての実空間
・景観－大通方面（札幌まちなか）の景色
切り開かれた大倉山
観客席導入に伴いさらに切り開かれる
オリンピックミュージアム / レストラン
歴史継承・観光地としての施設
計画：　樹木葬の導入
↓
人工林の創造
人の手による「眠り」の樹林
計画：　観客席のスロープ造歩道化
↓
・切り開かれた歴史の継承
・人工林観賞用空間
計画：ジャンプ台の芝を剥がす
↓
天然林の創造
～1960
1950
1952
ノーマルヒル
ラージヒル
出典：国土地理院地図
ジャンプ台の利用増加に合わせて山が開拓されてきた
■ 地形の変遷
【植生遷移】
先駆種
シラカンバ
パッコヤナギ
など
陽樹
カツラ
センノキ
イタヤカエデ
オニグルミ
など
混交林
陰樹
ミズナラ
ホオノキ
トドマツ
エゾマツ
など
1931
1972
2031
2081
2131
■ 原生林 / 天然林 / 人工林の植生の成長過程

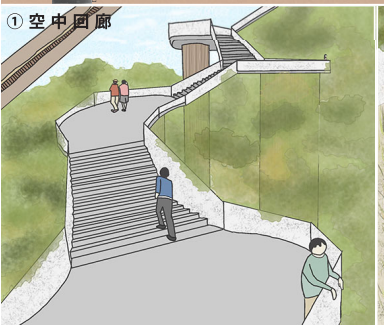
3 種の森とは？

ジャンプ台を人工物の風化と自然の営みを観察できる天然林、観客席を植樹によって作り出される人工林へと変化させ、現在も大倉山シャンツェを囲んでいる原生林と合わせて三種類の森が共生する緑地空間を生み出す

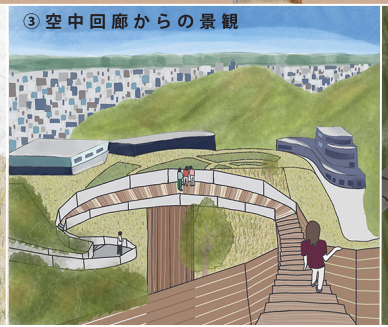
3 時代変化　1931~2031~2131 年　大倉山年表 4

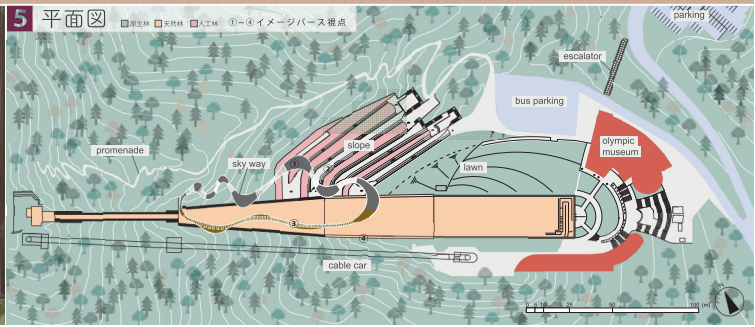





① 空中回廊

② 樹木葬 / 植樹


③ 空中回廊からの景観

④ 風化したジャンプ台

5 平面図